

東アジア学生ワークショップ参加報告書

京都大学文学研究科 修士1年 柘原 由紀

今回の東アジアジュニアワークショップで6日間韓国のソウルを訪れソウル大学・台湾大学の学生と交流した。

まず、フィールドトリップ(8月22日から24日)について書きたい。3日目の歴史博物館の展示、さらにソウル大学の学生に展示の説明をしてもらったことは印象的であった。ここでは、日本に統治される前の時代の写真をじっくりと見ていたのだが、韓国の男性はみんな帽子をかぶっており、着物や履物も独特で興味深かった。このように距離は近くてもその国独自の伝統衣装ひいては文化があることを、身を以て意識した。その後、創氏改名などの時代の展示を見て、文化を破壊するということを知識として知っていたけれど理解できていなかったと気づかされた。これらの事実は相手の文化をよく知ることではじめて理解できると感じた。韓国の側からの歴史を見ることで、東アジアという大きな枠組みのなかに自分がいることを意識できた。

次にワークショップ(8月25日から26日)について書きたい。今回は日本の労働組合や労働運動について発表したのだが、プレゼンテーションの技術、内容の質、英語力すべてにおいて悔しい結果になった。まず、プレゼンテーションについては自信をもって原稿を読むことができず自らの発表をコントロールできていなかったように思う。内容についても日本の雇用慣行について知らない人たちにもっと配慮が必要だったのではないかと感じた。語学力もまだまだ足りない。しかし、結果的にはすべてがこの先の研究の為になったと思う。台湾大学には社会運動が専門の先生がいらっしや、その方からの質問では自己満足の研究をしてはいけないということを思い知らされた。また、ほかの学生の発表を見ながら、自分の研究のいたらなさに気づかされ、この先もっと深く研究しなければならないという動機をもらうことができた。この悔しい思いをバネにもっと自分に力をつけたい。

最後に学生同士のアカデミックな場以外での交流で気づいたことについて書きたい。それはみんな似ているということだ。同じ顔、同じ髪の色、似ている言語、人との関係、考えていること。そして、学生同士でその国の政治や社会について語り合えたのが本当に有意義だった。太陽花学運(ヒマワリ学生運動)に参加していた台湾大学の学生、セウォル号の事故を韓国社会がどんどん忘れていくことを憂えるソウル大学の学生。私もいまの日本の政治について聞かれて意見を話した。こんな場がほかにあるだろうか。6日間という短い間だったが、本ワークショップにはいまの私たちにとって価値のあるものが濃縮されていた。